



進修同窓会HPにアクセス



筑波山の雲海 (撮影地 つくば市北条)

筑波登山 2

午後3時に土浦真鍋台を出発し、5里の道程を踏破した土中生一行20余名は、いよいよ筑波山神社から登山を始めました。中4回生の轍(本紙第169号で既述)を踏まぬように、五軒茶屋の主人父子を道案内に頼み、10時近くに五軒茶屋に到着、一夜を明かすこととなります。

引用文中の旧字体は新字体に改めました。【 】は筆者による注記です。また、筑波山登山ルートを進修同窓会HPの『月刊Acanthus』第173号3頁に掲載しています。

なお、高田保については、本紙第18号と第20号とで既述しています。

筑波登山

【1911 明治44年3月発行「進修第14号」所収】
三年 高田 保 【中12回】

二

三つの提灯を、一行の頼りとして、愈々山に入ったのだ。社殿に顔づいて、途を左にとつて、二三町行つた頃から、蓬々【ほうほう 風の吹くさま】と吹き上ぐる風は強くなつた。

先つきの茶屋で、三十分許りの休息に、五里の長途の疲れも去つたので、勇気当るべからざる概【概(がい) 気概。困難にくじけない強い意気】がある。箱根の山【注1】、進め矢玉【注2】のやれ何の歌かの歌から、果てはぐるぐるまいたほう【注3】に至るまで、喉【のど】も裂け、山も崩れよと計【ばかり】に怒鳴つて行く。山怪魘魅【さんかいちみ】^(注4)も魂消【たまげ】たらう。

「オーイ」

歌の絶え間には前者後者相呼び相応じて、深い深い闇から闇へ、山響【やまびこ 山彦】を伝へるのだ。木の根、巖【岩】角、途に当つて邪魔をする。杖を力に一歩一歩といふ意気地ないかたちもしたものだ。

霧か靄【もや】か、提灯の微かな【かすかな】光を繞つ【まとい】て、脚元【あしもと】をさへ、はつきりと燭らさ【てらさ】ぬ。前に立つた提灯も見えぬ。【北先生の】例の声だけは遙かに高い空から聞える。風は強い。

男女川【みなのがわ】^(注5)だ。角灯に輝らされて立つた北先生の姿。宛然【えんぜん】そつくりそのままさま。あたかも【たる】たる

乳洞探検者といふ風だつた。こゝで新しい草鞋【わらじ】を穿く【はく】。

更に登る。外套は雨に、襯衣【しんい】肌着。襦袢。シャツ【は汗にびつしよりとなる。暑い。風に揺られる梢から、こぼれる雫が襟首に入つたときは、ひいやり【ヒンヤリ】とした。

胸突八町を上りつめると、ちよつとした平地に出た近く赤い火が見えてる。五軒茶屋だ。先着の人が、軒につるして置いた提灯であつた。

今夜は此処に寝るんだ。腰を下した時は十時近くであつた。

箱根の山

「箱根の山は 天下の嶮 函谷關も ものならず……」で始まる『箱根八里』は、作詞：鳥居枕、作曲：瀧康太郎による唱歌・歌曲。1901「明治34」年発行の「中学唱歌」に掲載された。

進め矢玉

1894「明治27」年8月発行の「忠実勇武唱歌集」に掲載された軍歌。作詞：中村秋香、作曲：小山作之助(敵は幾方【よ】の譜)。YouTubeで聴くことができる。

ぐるぐるまいたほう

応援歌の掛け声、エール、あるいは応援の野次の言葉と思われる。同様の言葉が、旧制第三高等学校行進歌「あ、青春の脈血に」(YouTubeで聴くことができる)のエール、「やーれやれグールマイタホイ 柏の葉 柏の葉 フツとばせ」(柏の葉とは定期対校戦の仇敵である旧制第一高等学校のこと)や、旧制山口中学校(現山口高校)応援歌第一号の掛け声、「ホラ ヤレヤレヤレヤ グルグルマイタホイ」に見られる。

1907「明治40」年、創立10周年記念事業で、5隻のボートが進水し、12月1日(日)には、創立10周年記念式と記念競漕会「ボートレース」が予定されていた。水上(ボート)部部长であった尾崎楠馬先生は、ボート選手のコーチ、楽隊指導、応援歌伝授、そして小田原勇先生とともに式典準備と八面六臂の働きをしていた。その尾崎先生の日記に
○11月28日(木)

……放課後選手撮影。四時(川口艇庫側の水神祠二赴キ四時半ヨリ五時過迄五年第一選手ト共ニ練習帰舎相変ラズ飯甘シ。六時半ヨリ八時迄楽隊練習……
○11月29日(金)

……放課後舵手ヲ集メテ競漕ノ注意ヲナス。兩ヲ浸シ艇庫ニ行キ準備ス。……夜ハ七時ヨリ九時迄小田原ト打合ヲナス。四年ニヤジノ曲ヲ授ケ九時過入床ス。

とあり、寮の舎監もしていた尾崎先生が、東京高等師範学校在学中に覚えた応援歌や野次の掛け声を寮生に伝授していたようである。その中に「ぐるぐるまいたほう」もあり、それが寮生を通じて土中生にも広まっていたと思われる。

山怪魘魅(さんかいちみ)

「山怪」は山に棲む物の怪、「魘」は虎の形をした山神、「魅」は猪頭人形の沢神。いずれも山林の異気から生ずるといふ怪物。

男女川

つくば市を流れる利根川水系の河川。筑波山から南流し、逆川に合流後、つくば市大貫・中管間付近で桜川に注ぐ。百人一首の「筑波嶺の峰より落つる 男女川 恋ぞつもりて 淵となりぬる」(陽成院『後撰集』恋・7)で知られる。

三

家が！といつても掛け茶屋だ。荒木の柱に熊笹のかこひ——狭いからといふので、一隊は二手に別れ【分かれ】た。僕等本隊は、熊笹の囲ひの家の方に留まつた。西尾先生は他の五六人と、向ふの小屋に移つた。

爺さん——五軒茶屋依雲亭主人——の燃して呉れた櫓火【ほたび】「櫓」は、囲炉裏にくべたり焚き火などをする際の木の切れ端。木っ端【こっぱ】で、濡れた下衣を乾したときは真実うれしかった。外は今、猛風豪雨の真つ最中。

炬を囲んで爺さんの咄に耳傾けた。爺さん仲々口が達者だ。もつとも脚も達者

ださうで、風の吹く日も雪の日も、朝に上つて夕に下りる。頭が重いのが悪いのといふときは、薬もへちまもあつたもんぢやない。うんと一つ下腹に力を入れて、さて山を登るといつか病敵退散で、生れて此の年になるまで、たゞの一度も風邪を引かぬといふ。山の植物にも通じてる。天狗事件^(注7)も委しく【くわしく 委細】知つてる。爺さんは、山のぬしで、もあらうか。

爺さんまた博言学【「言語学」の旧称】者だ。諸国の方言を聞き分けるといふのを誇り顔に話した。これと、風邪を引かぬのが、爺さんの大なるプライドなのだ。北先生を捉かまへ【つかまへ】て、「先生、あなたは、北の方のお人ぢやねえですか」。

北の方、——北！当てられたと、皆は一時に手を拍つ【うっ】て噓した。が爺さんには其の意味が暁る【わかる】まい。北先生も笑つた。

「さう、まあ、北でせうね。然し、北も何国と見えますか」。

「さあ、越後……でもなし加賀でもあるまい。……はて、……先づ当たらないかも知れませんが、山形、秋田の方ぢやねえですか」

「少し違ふが、当たらぬ筈ですよ。佐渡ですもの、佐渡は四十九里浪の上ですからハ、ハ」。

「でせうな。どうも聞き馴れぬ調子で」。

「しかし、偉いですなあ」。

「お爺さんお爺さん、此の先生はね、北なんだよ。北先生つていふんだで」。

咄し好きの島田君が口を出す。爺さんも笑つた。

山頂の夜は雨と風とに更けて行く。炉辺の団欒【だんらん】も一人二人と欠けて行く。僕も外套を被つて、蓆【むしろ】にくるまつて寝た。熊笹の隙から、冷い風が吹き込んで来る。

^(注6)掛茶屋
路傍に葦簀【よしず】などを差し掛けて通行人を相手に営む、簡単な造りの茶屋。「掛け」は「差し掛け」の意。

^(注7)天狗事件
「天狗党の乱」。

天狗党は、水戸藩主徳川斉昭らの藩政改革を機に登場した、下級武士を中核とした急進派で、尊王攘夷を唱え、保守派の諸生党と対立した。1863【文久3】年の「八月十八日の政変」で、尊王攘夷運動が挫折すると、水戸藩では諸生党が実権を握つた。これに対して、天狗党の藤田小四郎（藤田東湖の子）らは、1864【元治元】年3月、朝廷の攘夷延期に反対を唱えて筑波山に挙兵、知足院大御堂に本陣を置いた。その後、筑波山を下りて各地で流血の党争を続けたが、やがて幕府の追討を受けることになり、敗走した。禁裏御守衛総督きんりごしゅえいそうとくに任じられていた一橋慶喜に尊王攘夷の真情を訴えようと京都に向かったが、幕府の追討軍に敗れ、加賀藩に降伏。翌年3月、武田耕雲斎、藤田小四郎らは斬罪。天狗党員828名のうち、352名が処刑され、他は遠島・追放などの処分を科された。



藤田小四郎像 (上)
(筑波山神社境内)

天狗党「田中愿蔵隊陣営の跡」碑 (下)
(つくば市神郡・普門寺境内)



四

流石【さすが】に、其の夜の夢は冷やかであつた。けれども、旅の疲れで、ぐつすり寝入ることが出来た。

眼が覚めたのは四時近く。吹くは吹くは、降るは降るは。横擲り【よこなぐり】に熊笹の囲ひを打つた。くのは雨。筑波峰の根も揺げとばかり動かすのは風。天の吼び【さけび】、吼号、獅子吼、地のどのさいわい。思いがけない幸せ。意外な幸運。時も移つた。風は稍々【しよろしよろ】ようやく。勢を斂め【おさめ】たらしい。向ふの小家から、笑声が頻りにもれる。「雲が飛ぶよ」

夜が明けたか外が白い。扉を推して見ると、アツ白い海！白い海！、雲が飛ぶどころぢやない。一面はたゞ見る、雲の海——雲の乾坤^(注8)。

爺さんが、夫婦餅【ふうふもち】を焼いて呉れた。それが、空き腹には非常に旨かつた。男を、男をと、男餅の方が売れ行がよい。高安君が、女を！と注文した時、一同がドツと手を拍つて噓した。餅と聞いて飛んで来た向ふの連中は、恐ろしい喰気の張つた連中であつた。

誰だか、登山者名簿を持ち出した。北先生が先づ、例の北先生一流の字で、北先生一流の覇氣満々たる文章で、三年生の意気が何とかやらと書かれた。次いで一同が先を争つてなすり出す。中にも異彩を放つたのは、下村君が得意の達筆を揮つ【ふる】。揮毫【て】、墨痕鮮かに、依雲亭と記したのであつた。中には、桂月

^(注9)や蘆花^(注10)氏などの俳句も見えた。様々な人が様々な手跡で様々な文句を書き散らしてある此の名簿は、一種面白味のある寄せ書きだ。

夫婦餅の袋に捺す印を持ち出した。紀念【記念】だといふので無暗【むやみ無闇】に押す。飯田君などは、授業料の領収証^(注11)にまでも、べつたりと押したものだ。

夜が明けきつた。依然として雨、風、やゝ勢が衰へただけだ。

^(注8)雲の乾坤
「乾坤」は、天と地、あるいは天地の間。高田は天も地も雲に覆われ尽くされている山中の氣象状況をこのように表現した。

^(注9)桂月
大町桂月⁽¹⁸⁶⁹⁾「明治2」年〜⁽¹⁹²⁵⁾「大正14」年。本名は芳衛【よしへ】。高知県出身の詩人・歌人・随筆家・評論家。『文芸倶楽部』『太陽』『中學世界』などに随筆を書き、美文家として知られた。作品は韻文・随筆・紀行文・評論・史伝・人生訓など多彩であつた。格調高い文体から擬古派と言われ、和漢混在の独特な美文の紀行文は広く読まれた。終生酒と旅を愛し、「酒仙」とも「山水開眼の士」とも称された。晩年は遠く朝鮮、旧満州(中国東北部)にまで足を延ばしている。

^(注10)蘆花
徳富蘆花⁽¹⁸⁶⁸⁾「明治元」年〜⁽¹⁹²⁷⁾「昭和2」年。本名は健次郎。熊本県出身の小説家。小説『不如帰(ほととぎす)』『国民新聞』に連載し、文名を挙げた。熱心なキリスト教徒となり、トルストイに心酔した。代表作に『自然と人生』『思い出の記』など。思想家・ジャーナリストの徳富蘇峰は兄。

^(注11)授業料の領収証
当時、授業料は生徒が直接、事務室に納付していた。

筑波山塊地図

(明治44年発行 一部修正)

筑波山名所絵図(下)

